

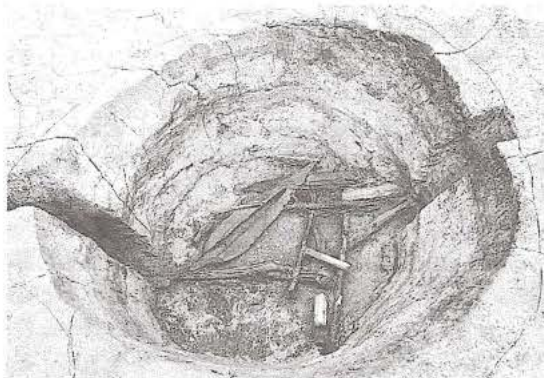
292. 平成11年度滋賀県下における 発掘調査の紹介(その2)

8. 古墳時代前期の農村集落の調査

守山市守山町 吉身西遺跡

吉身西遺跡ではこれまで市教委・県教委・県協会併せて80箇所以上で発掘調査が実施されており、縄文時代後期から江戸時代までの幅広い内容の遺構が検出されている。中でも中心となるのは弥生時代中期から古墳時代の遺構であり、竪穴住居・掘立柱建物や方形周溝墓・古墳などが検出されている。

今回の調査は県立成人病センター改築事業に関連するもので、約3,789㎡を対象としている。調査の結果、竪穴住居12棟(古墳時代前期10棟、後期2棟)、掘立柱建物2棟(時期不明だが1棟は竪穴住居を切る)、井戸8基、自然流路2条、人工流路(用水路)4条、古墳1基などが検出された。これらの遺構のほとんどは、出土遺物などから、古墳時代前期に属するとおもわれるもので、当該期の竪穴住居は自然流路に挟まれた比較的地盤の安定している部分に集中して設営されている。また、自然流路の肩部には直径約1.5mの素掘りの井戸とおもわれる土抗が掘られており、このうちの一つからは土師器とともに多くの木器が出土している。ほとんどは何らかの部材であるが、中には曲柄又鍬(いわゆるナスビ形着柄鍬と呼ばれるもの)なども含まれている。



吉身西遺跡C区SK03曲柄又鍬出土状況

調査地の北方には弥生時代中期の大集落である下之郷遺跡が存在しており、吉身西遺跡で検出されている方形周溝墓はその構成員の墓とみられるが、弥生時代中期末に下之郷遺跡が解体すると幾つかのグループに分散して集落を築くものとおもわれる。吉身西遺跡で弥生時代後期前半に成立する集落はそのグループのうちの一つであるとみられ、吉身西遺跡における集落成立の契機と考えられる。それ以降、比較的短期間に集落が営まれ、移動を繰り返していたものと推測されているが、今回の調査でも一部重複関係は認められるものの、出土遺物にはそれほど時期差はないものとみられ、この集落廃絶後はまた周辺の別地区へ移動したものと考えられる。

また、今回検出された古墳時代前期の集落は竪穴住居のみで構成されており、掘立柱建物は検出されていないことから、この集落は竪穴住居を住宅とした典型的な農村集落であったものとおもわれる。現在まで水田跡は検出されていないものの、出土した曲柄又鍬などの木器や人工的掘削による用水路などはそれを裏付けるものである。今回の調査では古墳時代前期を中心とする集落が検出されたが、調査地周辺では当該期の集落の検出例があまりなく、野洲川流域での集落の構造・変遷をたどる上で良好な資料となっている。

(財)滋賀県文化財保護協会 稲葉隆宣)

9. 福泉寺跡から「福林寺」銘の瓦が出土

野洲町永原字福泉寺 福泉寺遺跡

福泉寺遺跡は、野洲町永原字福泉寺の旧家棟川沿いに位置する遺跡で、室町時代の寺院跡として周知されている。しかしながら、今まで調査例が少なくその実態については不明な点が多かった。

今回の調査は、宅地造成に先立つ調査で、約2,500㎡について実施した。確認された遺構は、弥生時代後期の竪穴住居2棟・井戸1基、古墳時代初頭の竪穴住居2棟、中世の掘立柱建物3棟以上・井戸2基、寺院に関連する区画溝などである。遺物は、弥生土器、土師器、須恵器、黒色土器、青磁、信楽焼、瓦、木器、銅銭などが出土した。

今回の調査成果は2点あげられる。1点目は、竪穴住居と井戸を検出し、弥生時代の集落の一部を確認で

きたことである。これまで、小篠原遺跡や市三宅東遺跡といった現在のJ R野洲駅付近や、十八田遺跡といった野洲川左岸では弥生時代の集落を確認していたが、町内北部での確認例は野々宮遺跡に次いで2例目となった。井戸からは祭りに使用されたとされる丹塗りの長頸壺が出土しており、この付近に弥生時代の集落が広がっていたことは明らかであり、今後の調査で堅穴住居等の発見が期待される。

2点目は、福泉寺に関連する区画溝の検出と、そこから「福林寺」銘の軒丸瓦が出土したことである。この溝は東西8m以上×南北15mの範囲を区画しており、幅0.7m～1.0m、深さ15cmを測る。時期は15世紀末頃のもので、ここから出土した軒丸瓦と同範のものが、守山市の南屋敷遺跡からも出土しており、その関係が注目される（守山市教育委員会 岩崎茂氏の御教示による）。今後は、なぜ福泉寺の跡から「福林寺」という瓦が出土したのかという点と、南屋敷遺跡出土の同範瓦との関係を明らかにしていくことが課題である。

（野洲町教育委員会 松田 学）



区画溝出土の軒丸瓦

10. 古代の廃棄遺構と中世末期集落を検出

野洲町大篠原 大篠原東遺跡

野洲町大篠原字山田地内に所在する大篠原東遺跡は古墳時代～室町時代にかけての遺跡で、平成4年度から6年度の発掘調査によって中世末期（16世紀前葉）の村落遺跡を確認した。今回の調査は工場計画変更に伴い、平成11年7月～11月にかけて約6,600㎡を発掘調査した。調査地は大篠原鏡山西麓裾部に広がる小開折谷の中央、国道8号線成橋付近より南側に400mほど離れた位置にある。

検出された遺構は、調査区の北側で、7世紀後半から8世紀前半頃の歪んだり重ね焼きで融着した須恵器が多量に含まれた廃棄土坑や落ち込みを確認した。また、近くから須恵器の甕の中に自然釉が多量にかかっ



道路状遺構と大溝検出状況

た長頸瓶を収納した土器埋設土坑が検出された。出土状況から須恵器生産における祭祀に関わるものと推察される。中世遺構では堀状の溝で周囲を囲った大きな区画が2カ所確認され、その区画中に5～10m前後の方形に区画を持つ石列状遺構、掘立柱建物跡等を構成する2,000個以上にも及ぶ柱穴、クランク状の溝、井戸・墓坑を検出した。また、2時期の道路状遺構が検出され、南の山手側は最近の農道と重複しており、東西両側は農道と重複せず屈曲して北側へのびる。東西道路の総長は約35m、南北に約60mのコの字状を呈し、路側帯に石列を配する。ほぼその直下に重複して幅5m以上の大溝を確認した。出土物は、整理用コンテナに100箱以上にも及び、中でも古代の廃棄土坑は出土遺物の約4割を占め、中世の遺物は14世紀～16世紀前葉頃の黒色土器碗や土師器皿・焙烙・中国陶磁・瀬戸美濃施釉陶器・信楽焼播鉢・石鍋・石臼・五輪塔・軒丸瓦・漆器碗・一本鋤・井戸部材・土製品などが出土し、集落の主体は16世紀前葉と考えられ、当該期の集落を考える上で貴重な資料と言える。

（野洲町教育委員会 黒須靖之）

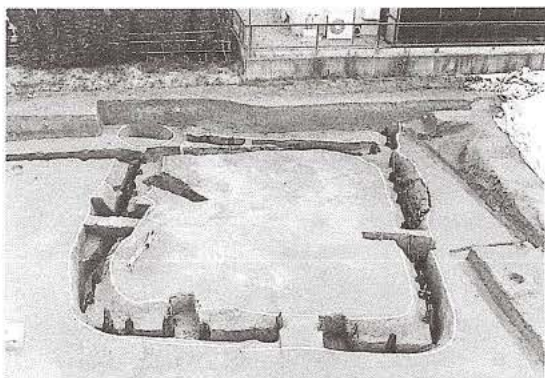
11. 長屋状の大壁造り建物を検出

中主町吉地 光相寺遺跡

光相寺遺跡は、野洲川が形成した自然堤防上に位置する7世紀から近現代まで続く複合遺跡である。

今回の個人住宅建設に伴う第26次調査において、白鳳時代後半から奈良時代初頭にかけての大壁造り建物を良好な状態で検出した。

検出した大壁造り建物は、長辺8.1m、短辺6.8m、床面積は45㎡を測るものであった。しかし、調査の終盤で、建物がさらに南方向に伸びていることがわかった。これは建て替えによるものとも考えられたが、柱筋がそろっていることなどから、間仕切りを有し、長屋状に連なっていた可能性が高いと思われる。このよ



大壁造り建物検出状況（北西より）

うな長屋状の大壁建物はこれまでに例がなく、長屋状を想定すると長辺16.2m、短辺6.8m、床面積95.8㎡と、最大級の大壁造り建物とすることができる。

また、この大壁造り建物は、まず深さ0.5～0.8mの溝を布掘り状に掘削した後、個々の柱穴を掘り、柱を立てるといった方法で構築されたことが復元できた。柱は、浅く埋まっているものと深く埋まっているものが交互になっていることから、深い柱が上部の桁を受けるもので、浅い柱がその間柱的な要素をもっていることもわかった。最長の柱は残存長1.7m、直径26cm、重さ70kg以上もあり、これまでの大壁造り建物の検出例では比較にならないほど太く、また深く据え付けられている。重量のある土壁を支えるには、これぐらいの柱が必要であったのかも知れない。なお、柱はすべてヒノキ材で、加工痕も良好に残っていた。

今回の調査で検出した大壁造り建物は、これまでの調査例の中では最も新しい時期のもので、渡来系氏族の風習がこの時期にまで残っていたことが明らかになった。また、大壁造り建物が部材を伴って良好な状態で検出された例はほとんどなく、考古学はもちろん建築史学においても貴重な資料である。

（中主町教育委員会 前岡孝彰）

12. 24基の方形周溝墓を検出

近江八幡市上田町 寒藪・川ノ口遺跡

近江八幡市上田町において平成10年11月～11年10月の間に市道建設に伴い約9,500㎡を対象に試掘調査・本調査を実施し、弥生・古墳・平安・中世の各時期の遺構を検出した。

遺跡の中心は弥生時代の方形周溝墓群である。今回の調査では計24基を検出した。周溝墓は調査地西南隅で検出した幅8～14mの河川により形成された微高地上に築造されている。主体部は削平を受け検出できなかったが、周溝の残りは比較的良く、9基には供献土

器が見られた。築造年代は、この土器から弥生中期後半～古墳初と考えられる。周溝の形態は2辺に陸橋部を持つもの、一隅に陸橋部を持つもの、陸橋部を持たず四周を掘下げるものがある。このうち2辺に陸橋部を持つものは最も古い周溝墓にのみ見られた。規模は最大のもので1辺17m、溝の深さ70cm以上を呈する。

古墳時代の遺構は周溝の一部を用いた東西方向の2本の溝・南北方向の溝を検出した。溝の掘下げは周溝堆積途中になされ、掘下げ時に残っていた周溝墓墳丘を避けている。溝の年代は東西方向の溝が4世紀前半



第2調査区全景

～5世紀前半、南北方向の溝が5世紀中葉～7世紀後半と考えられる。

平安時代の遺構は溝を検出した。この溝には土壌状になった部分があり、ここから10世紀中葉～12世紀後半の黒色土器・回転台土器器が多数出土した。

今回の調査成果は大規模な周溝墓群の存在を確認できたことである。墓域は以前の県教委の調査結果とあわせると、南北幅が130m程度、東西幅が今回の調査地を東端とし320m程度と考えられる。また、県教委の調査では墓域の西側において堅穴住居が見つかり、集落遺跡の存在が考えられるため、当遺跡との関連が注目される。

（近江八幡市教育委員会 才本佳孝）

13. 本丸跡の発掘調査

安土町・能登川町 特別史跡安土城跡

安土城の中心である主郭部の調査も5年目を迎え、平成11年度は主郭部の中心である天主跡・本丸跡・三の丸跡などを調査対象地として、発掘調査および測量調査を実施した。当該地のうち天主跡と本丸跡は昭和15～17年に発掘調査が行われていることから、本年度は未調査の本丸建物周囲の状況の確認と、本丸建物の礎石配列を確定することに主眼を置いた。

発掘調査では、本丸建物に伴う新たな礎石や、礎石

を抜き取った痕跡を多数検出し、本丸建物の礎石配列をほぼ確定することができた。その結果、本丸建物は従来考えられていた1棟の建物ではなく、2棟の建物の南側を廊下状の建物で連結している構造が明らかとなった。またこれら建物の北側と東側には予想に反して様々な施設が存在することがわかった。北側では建物の敷地境を示す葛石があり、葛石と石垣の間は溝になる。この溝は東西両建物の中で、幅約1.8m・長さ約6m・深さ約1.2mの石拵と接続している。建物の東側では葛石列、土間状のタタキや石拵、地面に据えられた笏谷石製の手水鉢のような容器が見られる。また建物南側は空地になるが、本丸南石塁の直下では本丸建物のものとは別の礎石列を検出した。

これらの調査結果と礎石配列の検討から、西側の建物は京都御所の慶長度内裏清涼殿に酷似していることがわかった。清涼殿は天皇の生活空間で、この建物は「信長公記」に記述のある「御幸の御間」を含む建物であると考えられる。これに対して東側の建物は、建物に近接して様々な施設を有することから、西側の建



本丸西側建物跡礎石群

物に対して裏方の空間と考えられる。また本丸南石塁直下で検出した礎石列は、石塁上に建っていた多聞槽の一部になることが推測される。

今回調査した本丸建物を含む主郭中心部全体の構造については、次年度に明らかにしたいと考えている。

(滋賀県安土城郭調査研究所 岩橋隆浩)

14. 弥生時代後期の環濠集落の調査 能登川町山路 石田遺跡 (3次・5次)

石田遺跡は、能登川町のほぼ中央部、大字山路と大字林に所在する、縄文時代後期・弥生時代後期～古墳時代初頭・中世の集落跡である。石田遺跡は琵琶湖(内湖)に接していた集落跡で、弥生時代後期～古墳時代にかけての湖東地域の拠点集落である中沢・斗西遺跡に行くための湖上交通の窓口的な集落の性格が考

られている。

発掘調査は、能登川駅西土地区画整理事業に伴うもので、道路建設部分の調査を平成10年度から実施している。前年度に実施した調査(第1～3次)では、弥生時代後期から古墳時代初頭の溝跡や河跡などが検出されている。〔「滋賀文化財だより」No.257号〕

前年度に引き続き実施した石田遺跡南側の調査(第3次)では、平成4・5年度に民間開発に伴う調査(林・石田遺跡・「滋賀文化財だより」No.183号)で検出された弥生時代後期の溝跡(南環濠)の続きが検出され、長さ180m以上あることが確認された。また、この溝から木製品の未製品(鋤2点・鉞1点)が意図的に水に浸けられた状態で出土した。

北側の調査(第5次)では、1・2次調査で検出された溝跡の続きが検出され、北側の環濠が三重であったことが確認された。内側(集落側)の溝からは、大量の弥生時代後期の土器や木製品が出土した。木製品の中には木製陽物(男茎形木製品)があり、木製陽物の出土した周辺からは壺や高坏、鉢、器台が多く出土



北環濠遺物出土状況

していることから、祭祀的な行為が周辺でおこなわれていたことが考えられる。

今年度の調査では、石田遺跡の北側と南側で環濠が確認され、集落の規模が想定できるようになってきた。来年度に実施する東側の調査で新たな成果が得られるであろう。

(能登川町教育委員会 杉浦隆支)